

## 幼稚園教育実習プログラムの検討

—鹿児島女子短期大学生の実習報告—

坪井敏純

鹿児島女子短期大学（以後本学と称す）児童教育学科幼児教育専攻の学生は、教育実習として次の4つの実習を行っている。

### 1. 幼稚園実習1（以後実習1と称す）

本学の附属幼稚園（3園）を利用して、1年次の後期に実施される。

### 2. 幼稚園実習2（以後実習2と称す）

鹿児島県下の幼稚園を利用して、2年次の前期に実施される。

### 3. 保育所実習

鹿児島県下の保育所を利用して、2年次の夏休み期間中に実施される。

### 4. 施設実習

鹿児島県下の施設を利用して、保育所実習に続き2年次の夏休み期間中に実施される。

本研究は実習2における学生のアンケート調査に基づいて、その実態の把握と将来の実習プログラムを検討するために行われた。

幼稚園実習としては実習2に先立ち、実習1において基本的な指導が事前になされている。実習1の指導としては、幼児の行動観察、実習ノートの取り方、指導案の書き方などの他に、部分保育の形で分担して1日の保育を数人の実習生に担当させている。指導案を書き担当保育を経験することは保育者としての技術を高めるために貴重な体験となる。とかく観察だけでは受け身的な学ぶ姿勢になりがちであり、教えるという活動を経験しておくことで実習2への導入がなされているようである。

しかし実習生が多いため、実習生全員をそれに割り当てると担当者以外は観察を行うことになり、逆に幼児と接する機会は減少してしまう。さらにその園の保育者による公開保育などの形で、実習の初期に保育参観を行うが、そのクラス担任の保育活動を見る機会がほとんど無く、いわば手本となる日常の保育活動をあまり観察できないといった問題点がある。

このような問題点を抱えてはいるが、どのような実習にしても限られた期間の中で全てを満足させることは当然不可能であり、むしろほかの実習とその関係を有機的に保っておくことでこのような問題を解決する方向に持って行くべきであろう。その意味で実習1と実習2の内容がどのように関係づけられているかを調査する必要がある。さらにほかの教育実習も含めて実習全体をトータルに捉えることが、学生の指導にあたって望ましいと思われる。今回の報告はその一環として実習2の実態を把握するために行われた。

## 方 法

**調査時期** 1987年6月

**調査対象** 鹿児島女子短期大学児童教育学科幼児教育専攻生。

**調査項目** 調査項目は大きく分けて、次のような内容であった（詳しくは付録参照のこと）。

1. 実習園のクラス編成
2. 日程と役割
3. 実習中にその園の保育者または園長から指導を受けた内容
4. おもに指導を受けた保育者について
5. 保育者という職業について
6. 実習中の保育内容について
7. 実習の感想。

**手 続 き** 付録のアンケートを実習後配布し、一週間以内に回収した。回収率77%（138名）

## 結果と考察

付録のアンケート項目のうち、本研究の目的に必要なと考えられるものを選択して報告する。

## 1. 実習園の数

101園を利用した（不明2名）。このうち本学の学生が2名同時に実習した園は17園、3名は8園、4名は1園、したがって1名は75園であった。かなり広範囲で実習が行われていることがわかる。

## 2. 担当したクラスの幼児の年齢

一般にその園で実習生の指導を担当する保育者のクラスを中心に実習が行われるので、実習生が接する幼児の年齢は図1. に見られるような範囲となっている。ただし図1. では実習のクラスを日によっては移動し、他のクラスに（異年齢あるいは同一年齢のクラス）配置された場合でも、2日以内であれば担当したクラスとして分類しなかった。その理由として、担当保育は配属されたクラスで行う場合が一般的であり、中心となる担当の幼児の年齢がわかればよいという判断によるものである。

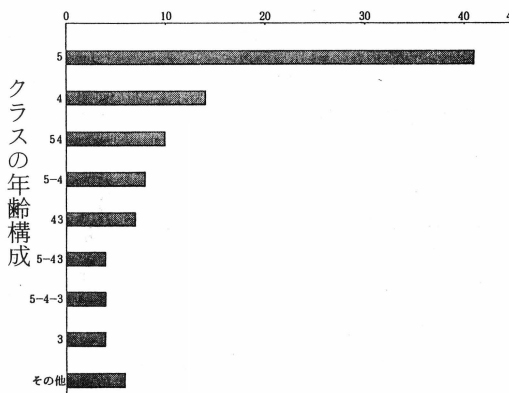


図1. 幼稚園実習2でおもに実習したクラスの幼児の年齢構成と実習生の割合

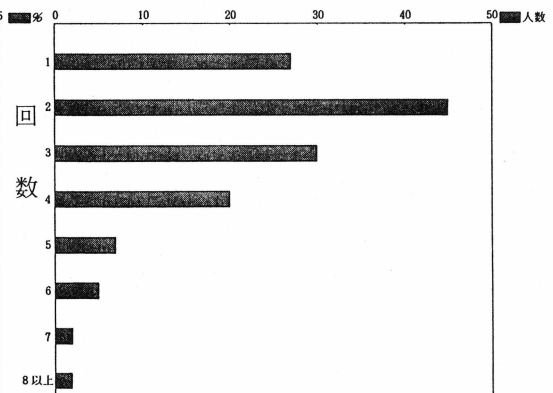


図2. 幼稚園実習2において、中心活動を担当保育した回数と人数

図1. によれば、全体としては実習で担当する幼児は5歳児が圧倒的に多く(41%)、単一の年齢構成の1クラスだけを担当した学生は全体の60%であった(図1. の5, 4, 3はそれぞれのクラスが5歳児, 4歳児, 3歳児の単一年齢の幼児からなるクラスであることを表している)。特に混合保育(例えば図1. の54はそのクラスが5歳児と4歳児を含む混合クラスであることを表している)を含め、クラス移動がなくひとつのクラスで実習した学生が77%に及んでいる。この割合のなかには、2日以内のクラス移動は考慮されていないので多少変動はあるにしても、実習生の指導を担当した一人の保育者に指導されることになる場合がほとんどである。

しかし園によっては、特に実習生のために配慮して、実習のクラスを移動させているケースが17%見受けられた(例えば、5-4と示されているのは、5歳児クラスと4歳児クラスでそれぞれ3日以上実習したことを意味している)。また異年齢の幼児と接する機会があったのは、混合保育のクラスを担当した学生を含めると全体の約40%であった。むろん自由遊びの時間などで他のクラスの交流はほとんどの学生が経験しているようである。

実習1では単一年齢の幼児で構成されたクラスでの実習であるため、実習2でクラスを移動することにより異年齢の幼児と接触することは、幼児の発達的な変化を知るうえで望ましい経験と考えられる。しかし細切れの移動は幼児との人間関係を作りあげるといった経験をなくしてしまうことにもなり、2週間程度の期間とはいえ、まとまった期間の保育の流れや構成を知るには適切ではない。特に保育所実習が続いて行われることから、かならずしもクラスのローテーションは必要ではないかもしれない。実習生が1園1~2名という利点から、幼児と接触する機会を多く持つことと、実際の保育を十分に観察または経験しておくことがこの実習では望ましいのではないか。

### 3. 設定保育(中心活動)の担当保育の回数

図2. は研究保育を含めた設定保育の担当回数を表わしたものである。実習生の負担を軽くするために、担当保育の回数をわざわざ減らすという配慮をしている園が多く見られる。しかし保育内容として六領域が設定されている点を考慮すると、研究保育を除けば半数の実習生が1度しか経験していないのは少ないように思える。

### 4. 設定保育(中心活動)の時間帯での実習生の役割

役割を、「担当」(指導案を実習生が作り、それにそって活動する)、「参加または補助」(活動に参加し幼児との接触はあるが、指導内容はクラス担任が統制している)、観察(保育には直接参加せず、保育の観察だけ)の3つに分けた。図3. は実習の日程とその役割の関係を示したものである。最終日を除いた後半の8~11日目に担当保育が設定されることが多い。特に研究保育(評価保育)は10~11日目に集中している。初日は観察が約60%と高いが、2日目から参加の形でクラス活動に入っていく。4日目からは担当保育を任される学生は20%となり観察から、参加、担当という過程が見られる。7日目から担当保育が増加し11日まで計画的な幼児の保育を行うことになる。この間観察の割合に変化は見られず、15%前後の学生は観察をしている。

本年度は実習時期の変更に伴い、参観日や地方の研究大会などが重なり、従来の実習方法とは異なるスケジュールが組まれた可能性もあるため断定することはできないが、実習の後半は幼児との直接的な(担当と参加を加えて)接触が80%をこえている。この点を次の自由遊びとの関連で見てゆくことにする。

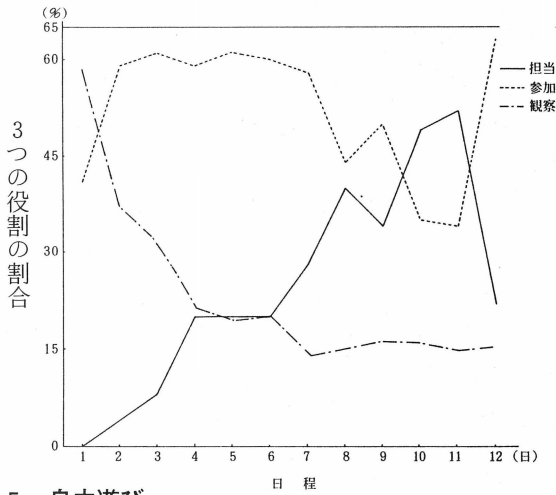


図3. 幼稚園実習2の日程と実習中の役割 (中心活動に関して)

【担当】は実習生が保育計画を立て、それにしたがって保育を行なう。【参加】はクラスの担任が立てた計画にそって、担任と共同で保育を行なう。【観察】は担任の保育を観察、記録し、保育には直接タッチしない。

5. 自由遊び

中心活動に入るまえの活動として回答を求めたが、かならずしもこのような分類をしていない園も多く、またその日のスケジュールによっては中心活動の導入として設定されていることもあるので、特別な設定をしない活動（本来このような活動は厳密な意味ではありえないが一応中心活動のまえの活動）の時間帯での役割を調べたものである。その結果が図4.である。設定保育と比べると、観察の割合が少なく、自由に幼児と接触している点が明らかである。担当と参加を加えれば3日目から90%以上の学生が幼児と直接接する機会を与えられている。大森（1987）によると1日保育の担当者が表1のようになっている。学生の感想では「もう少し担当保育をしたかった」という意見がほとんどである、という指摘を考慮すると単に接する機会が多いことだけでなく、「実際の指導を経験したい」という学生の積極的な実習態度を生かす方向も考えなければならない。むろんこれは前述したことであるが、実習中の園の保育計画との関係があり、特に今回は行事が入っている園が多いことが担当保育の回数に影響しているかもしれない。

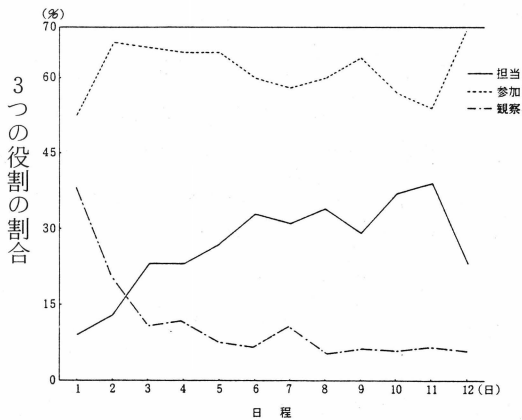


図4. 幼稚園実習2の日程と実習生の役割 【担当】、【参加】、【観察】の分類は図3と同様である。

表1. 1日保育の担当日数 (大森, 1987)

日数	人数
0	61
1	54
2	14
3	5
5	1
7	1
8	1
11	1



さらに大森（1987）の報告では、実習園での実習プログラム（観察、参加、担当の配置）が次のように分類されている。

- A：観察実習を特に設定せず、初日から参加実習を開始し、この参加実習を実習全期間の基本におき、適宜担当保育を組み入れて行く型（53%）
- B：1～2日程度、実習初期に観察実習を設定し、その後は参加実習を基本にし、担当実習を組み入れていく型（21%）
- C：全期間を通じて観察実習と参加実習を基本におき、担当実習を組み入れて行く型（20%）
- D：全期間を通じて観察実習を基本におき、参加実習を組み入れて行く型（4%）

本研究の調査でも設定保育での観察の割合は自由保育と比べるとほぼ半分になっており、自由遊びの時間帯は幼児との接触がはかれるように配慮されているようである。

## 6. 実習ノートについて

実習園から学生が事前または実習中に指導や注意を受けた点の中で主だったものを報告する。カッコのなかの数字は件数である。

### (1) 表記について

- a. 誤字・脱字（9）
- b. 見やすく；段落、見出し（3）

### (2) 記録方法

日案、細案のような書き方をする（29）

### (3) 記録内容

- a. 保育者の動きや働きかけ、それに伴う幼児の活動の変化を記録する（10）
- b. 目標についての反省が無い（2）
- c. もっと詳しく（2）

### (4) 自分の意見の書き方について

- a. 考察には自分の意見を含めて書く（12）
- b. 自分の意見は、反省・感想に書く（3）

以上のような指導がなされたが、全体としては実習1の記録方法で問題はなく、74%の学生は特に注意を受けていない。約20%の学生は「よく書けているとほめられた」と報告している。

## 7. 細案の書き方について

細案の書き方について実習ノートと同様に指導・注意を受けた点を報告する。

- a. 要点を押えて、長く書かない（20）
- b. 幼児の実態を詳しく（7）
- c. 予想される幼児の行動は詳しく（5）
- d. 指導上の留意点は保育者の働きかけを詳しく（11）
- e. 製作活動では、作り方、完成図を書き入れる（5）
- f. 環境構成を詳しく（3）
- g. そのほかには、ペン書き、時間の配分の記録などに注意がなされている。

指導案の書き方では、その園で独自の方法を持っているところもあり（7園）、事前に実習担当の保育者に指導を受けることが必要であろう。また「詳しく」と「簡潔に」の兼ね合いは判断しにくく、実際に先ず書いて指導を受けるしか方法はないが、だいたい「1枚にまとめるように」と指導されているようである。特に指導のなかった学生は43%おり、実習ノートと同様に実習担当の保育者に事前の指導を受けることで問題はないように思える。

## 8. 感銘を受けたこと

幼児教育に携わろうとするものは、幼児と一緒にいること自体が楽しいと思うことが何といても必要である。しかしなぜ楽しいのか、そのことが自分の職業としてどのような意味をもつのかを考えることがこの実習の一つの目的でもある。そして教育者としての自分を見つめ直す絶好のチャンスでもあろう。特に実習1では、附属の幼稚園で行われる実習ということもあり、学生の立場つまりまだ教えてもらおうといった意識が強いように思われる。ところが実習2では短大の傘の下を離れて、自分の力を試す時間がかかり与えられることで、保育者という立場をより強く感じられるのではないだろうか。また、実習1を経験したことから自分の保育を見直す機会にもなるであろう。

この感動を感じた内容を調べることで、何をまとめて保育者になろうとしているのか、という動機的一端を知ることができるかも知れない。それは職業を選択するうえで、どのような点に魅力を感じているかが影響するからである。問題なのは、それが一過性のものであったり、本来の教育活動とは関係のないもので実際の職業選択に妥当な理由ではない場合である。以下は感銘を受けた内容を分類したものである。カッコ内は件数。

### (1) 幼児との接触 (74)

この内容には、なついてくれた、仲良くしてくれた、先生として慕ってくれた、たくさん話をしてくれた、実習の終りに別れを悲しんでくれた、などの記述がある。

### (2) 指導内容

- a. 製作活動やダンスなど教えたことを、とても楽しくしてくれた (32)
- b. 指遊び、折紙、あやとり、絵本などの遊びを教えたら、何度も繰り返して遊んだ (10)
- c. 自分の指導でできないことができるようになった (2)
- d. 特定の幼児と何度も接触することで、話そうとしなかった子が話しかけてくるようになったり、乱暴な子が素直に言うことを聞くようになった (12)

### (3) 幼児の感性や思いやり

- a. 発想のすばらしさ (8)
- b. 実習生の失敗を慰めてくれた (5)

### (4) 担任の指導 (2)

実習生を指導した保育者の熱意や保育の指導内容について感銘を受けた、と記述されている。

### (5) お別れ会 (69)

この会での感動はむしろ、それまでの実習の経過が影響するので、内容の問題は重要ではないかもしれないが、幼児の「忘れないでね」、「頑張ってるね」といった言葉や、プレゼントに似顔絵をもらったこと、逆にあげたプレゼントをととても大事にしてくれたことなどが記述されている。

学生は実習へ行くまえに感じている不安に、「幼児の中にうまく溶け込んで行けるだろうか」といった幼児との対人関係の問題と、「自分の指導で幼児が楽しく活動するだろうか」といった幼児の指導の問題がある。したがって上記の感銘を受けた内容のほとんどがこの2つの不安に関するものであったことは当然のことかもしれない。

発達段階の青年期にある学生にとって、Erikson, E. H. のいう自己同一性の危機を乗り越えるためには、保育者としての適性や将来の職業についての見通しに関して現実的な認識を必要としている (Newman & Newman, 1979)。つまりこの実習は単に保育技術の向上や幼児の発達過程に関する知識の獲得に留まらず、学生自身が次の発達段階に進むきっかけを与えているのである。今まではいわば大人から教えられる立場であったものが、教える立場に立ったとき否応なく自分というものを直視せざるをえなくなる。なぜなら幼児期は特に「大人」をみて育って行くからである。つまり保育者の持つ、知識、技術、さらに重要なのは社会的な価値観、例えば道徳観、人生観、教育観などが保育者の行動によって幼児に伝えられて行くプロセスを保育は含んでいるからである。このような保育内容（幼児教育では生活そのもの、もっと広く捉えれば生きるということの意味といってもよいのではないか）を幼児に伝えて行くとき、保育者がその保育内容について明確な知識がなかったり、社会的な価値観について曖昧な基準しか持たず、物事の判断ができなければ保育という教育活動が成り立たないのである。すなわち保育活動には自己をもう一度とい直す作業が含まれているのであって、自己変革を常に必要とされる。そしてこのような自己変革の過程で、自己の成長とその喜びを感じることができたとき、保育者としての自分を見出せるのではないだろうか。残念ながら最後に回答を求めた感想のなかにも、自己を改めて見つめなおした内容のものはほとんど見あたらなかった。質問の形式が適切でなかったかもしれないので、今後この実習を学生自身がどのように捉えているかを具体的に問う必要があると思われる。

さらにもうひとつ重要なことは、幼児に暖かく受け入れられる価値ある自分を実感しなければならない。幼児との対人関係のなかで、幼児の成長に影響をもつ自分を発見することは、保育者としての効力感を獲得することにほかならないのである。それは感銘を受けたことの(1)、(2)などの内容が直接学生の効力感を高め、ひいては学生自身の自己実現に影響を及ぼすことになるのである。したがって単に一方的な幼児との関係ではなく、自己の可能性を引き出してくれる幼児からの働きかけや反応が重要な意味をもつことを認識しなければならない。つまり保育活動とは保育者と幼児との相互交渉のなかで成り立っているのである。このような相互の関わりが感じられたとき、実習の目的の大部分が達成されたといっても過言ではない。その意味でほとんどの学生が「まだまだ未熟な保育者だ」という自己認識も手伝って（不安や、自信の無さ、さらには責任逃れという批判があるにしても）、「幼児に受け入れてもらった」というような幼児主体の態度はむしろ健全なものであろう。

付け加えておかなければならないのは、指導を受けた保育者に対するものである。感銘を受けた内容についての質問が、自分の保育について回答するような文脈であったため指導担当の保育者についてはわずかしか触れられていないが、指導担当の保育者の指導法や内容についての質問の項目ではかなり影響を受けていることが示唆される。

## 結 論

本学の児童教育学科幼児教育専攻生は例年およそ70%～80%が、保育所と幼稚園を含めた幼児教育に関係する職業に就職している。したがって教育実習は学生の将来の職業に直結した貴重な経験となっている。そして保育者としての幼児の前に立つことは、より深く「教育」という活動に触れる絶好の機会でもある。このような重要な意味をもつ実習は、単に「実習」という独立したカリキュラムではなく、まさに総ての短大の幼児教育を実践して行く中心的役割をもったものとして捉えることも可能であろう。このような考え方に立てば、いかにして実習を短大の講義と有機的につなげて行くかという問題を解決しておかなければならない。さらにもう一つの問題は、幼稚園実習1、幼稚園実習2、保育所実習、施設実習といった4つの教育実習を単なる繰り返しに終らせず、それぞれに具体的で明確な目的を学生に示し、さらに広い視野に立った「教育」という一つの活動のなかに関係づけて行くように短大の教育がなされなければならないのではないだろうか。本研究はこのような観点から、先ず幼稚園実習2の実態を把握し、幼稚園実習1との関連から将来の実習プログラムを検討することが目的であった。そこでアンケートから得られた内容を検討し、現状での望ましい実習のありかたについて、いくつか提案しておきたい。

### 1. 担当クラスのローテーションについて

異なるクラスの幼児と接触させる意義は、そのクラスが以前担当した幼児と異なる年齢である場合、(1)幼児の発達段階の特徴を知ることができる、(2)多くの保育者と接し、その教育観などを知ることができる、(3)異なる保育内容や方法を知ることができる、などが上げられる。また同じ年齢のクラス間でのローテーションでは上記の(2)と(3)がその利点であろう。逆に欠点としては、実習期間は2週間とはいえず実質は12日であり、さらにこの時期は父親参観、園外保育、職員研修などが入っている園も少なくないのでローテーションすると細切れの観察になることである。そのため、1. 保育の前提としての幼児との安定した人間関係を作ることが難しい、2. ある程度まとまった保育計画の流れや構成が把握しにくい、3. クラスの幼児数が多いので、短期間では個々の幼児の行動変化や特徴を理解することが困難である、といった問題点を上げることができる。

このようなローテーションは基本的には必要であるが、他の実習との関係で考慮しなければならない。同時にその園全体のクラス構成（例えば混合のクラスが多いとか縦割り保育を重視しているなど）の問題を無視できない。そこで個々の問題を再検討してみたい。先ず、長所として上げられた(1)では、約1か月後に保育所実習を控えており、異年齢の幼児と接する機会がある。特に保育所実習ではローテーションや混合クラスが多いので、この幼稚園実習2でどうしても必要な配慮とは思われない。またこの実習でも実習生の約24%はローテーションしなくても混合クラスで異年齢の幼児と接している。次に(2)、(3)は捨て難い利点であるが、実習期間の短さを考えると、特に(2)は達成されにくいのではないか。その理由として、実習生に対する指導の責任が不明確になり、中途半端な指導になってしまう恐れがある点が上げられる。

以上のようにローテーションは、少なくともこの実習2ではその長所を生かすことができないと思われる。実習1を補うためにも実習2では、その園の実習担当の保育者を固定し、一つのクラスで保育活動に関わり、責任をもって指導してもらうことが望ましい体制ではないかと考える。

## 2. 担当保育について

中心活動の担当回数を見ると、研究保育を除けば実習生の52%がわずか1回しか経験していない。小学校の教育実習と直接比べることは必ずしも適切ではないが、その実習では主要科目の研究授業を経験している点を考慮すると、余りにも担当保育が少ない。もちろん幼児教育の6領域は個別の独立した内容ではなく、極論すれば一つの活動にその総てが含まれると一般には理解されている。したがって設定保育と、小学校の授業を同一レベルで捉えることには問題は残るとしても、保育内容を構成する作業として何ら変わることはないのであって、そのような活動の経験としては少ない。

設定保育だけが実習ではなく、自由遊びなどの活動などを含めて考えるべきであるが、その意味では自由遊びでの担当が多く取り入れられている点は評価される。それは実習生の感想のなかで、実習1と比べ幼児と直接接する機会が多かったことに満足したという意見が多いことに反映されている。

実習園の保育計画や行事などとの兼ね合いで担当保育の回数は決定されるわけであるが、せめて屋内と屋外での担当保育が設定されていることが望ましいのではないかと思われる。

## 3. 担当クラスについて

特にどの年齢のクラスが望ましいということはないと考えられる。できれば新任の保育者のクラスは実習生の指導という意味で負担が大きすぎるため避けるべきであろう。しかしその園のクラス構成などにも影響されたため、この問題については実習園に任すべき事柄である。

## 4. 実習ノート及び指導案について

実習ノートについては、実習1の記録方法でほとんど問題はないが、記録方法に関して日案や細案のような書き方を指示されているケースがある。しかしこれは実習1で指導がなされていないわけではなく、実習1では実習生が自ら考えたノートの取り方を採用するという柔軟性をもった対応をしている。そのためある程度の基本的な書き方の枠組は示されているが、実習生のノートの取り方に違いが見られる（つまり例えば日案のようにノートをまとめている学生もある）。したがって事前の打ち合わせに実習生がその実習園を訪問した段階で、その園で採用している方法について指導を受けておく必要があろう。また細案なども実際に書いた段階で指導を受けることになるので、実習1において指導を受けた方法でとりあえず書かざるをえないのではないか。ただ細案についても実習1で指導された方法で問題はないように思えるが、実習1では初めて書く細案なので気づいたことは総て書き入れるように指導されており、何枚にも渡った指導案になっている。その点で本来の指導案としては記述が多すぎるため、この実習2では「長すぎる、書きすぎる」といった注意がなされているのであろう。しかしこの点についてもその実習園の考え方によるので、一概に「1枚にまとめる」ように事前指導することはかならずしも良いとは言えない。結局、その園の実習担当の保育者から、その場で指導を受けることで充分であろう。

## 5. 実習の事後指導について

本学においても実習事前事後指導といったカリキュラムが生まれ、実習後の学生指導が行われている。しかし一人ひとりについてなされるわけではない。特に、うまくできなかったとか保育への疑問を抱えたままになっている学生はかなりいる。このあとに保育所実習を控えて、この幼稚園実習の反省と、それをふまえ将来にむけて学生がそれぞれの勉学に対して具体的ではっきりと目標を設定できるような指

導が必要ではないだろうか。例えば特定の研究テーマに絞ってそれぞれの学生が自ら学んで行く活動を保証する時間や授業などをカリキュラムに組み込む、といった方式も考えられる。おそらくゼミ方式を今後取り入れて行かないかぎり、このような対応は難しいであろう。しかし単にそれぞれの担任に学生を振り分けるといったやり方では成功しないであろう。さらに実習の前後だけの指導ではなく、2年間という長期に渡った指導という発想の転換が必要ではないか。この問題の解決はかなり急を要するものであり、早急に検討しなければならないと思われる。

以上の報告と提案は、ほかの教育実習についてその実態の把握がなされていないのでトータルな捉えかたをするには今後の調査を待たなければならない。したがっていわば中間報告の域を出ないが、実習は保育技術の獲得と向上だけでなく、青年期における学生の心理的な発達に大きな影響を与える出来事であるという認識をもって、教育実習の問題を考える必要性があることは強調しておきたい。

(1987年10月29日 受理)

#### 参 考 文 献

- 大森 隆子 1987 実習プログラムの検討について 全国保母養成協議会第26回大会発表論文集  
(印刷中)
- ニューマン, B. M. & ニューマン, P. R. 福富 護・伊藤 恭子(訳) 1979 生涯発達心理学  
川島書店 (Newman, B. M., & Newman, P. R. 1975 Development Through  
Life - A Psychosocial Approach)
- 平井 信義 1986 保育者のために 新曜社

付 録

幼児教育学科2年生実習アンケート

2年\_\_組 番号\_\_ 名前\_\_\_\_\_

1 実習園について

1-1 公立・私立 幼稚園名\_\_\_\_\_

1-2 クラスの数

年長\_\_クラス 年中\_\_クラス 年少\_\_クラス

混合(5,4歳)\_\_クラス 混合(4,3歳)\_\_クラス

障害児の受け入れ：有・無

2 担当した保育内容について

2-1 おもに担当したクラス\_\_歳児

2-2 担当保育の内容

担当した活動箇所にマルを記入してください。また観察・参加の場合は、K(観察)またはS(参加)を記入してください。なお、その他の活動があれば簡単に記入してください。

日にちについて変更があれば訂正してください。

日 程

クラス		登園	自由遊び	体操	中心活動	その他	食事	降園
	8							
	9							
	10							
	11							
	12							
	13							
	15							
	16							
	17							
	18							
	19							
	20							
	21							

### 3 実習中に先生から直接指導を受けたことについて

次のような事柄について自由に記入してください。

特に注意を受けたことや逆に誉められたことなどを、具体的に記入してください。

- 3-1 実習ノートの付け方について
- 3-2 細案などの指導案の書き方及び立てかたについて
- 3-3 保育中の行動について
- 3-4 実習中の幼稚園での生活について
- 3-5 実習中の個人的な日常生活について
- 3-6 幼稚園での対人関係について
- 3-7 実習生あるいは保育者としての心構えや職業観について

### 4 あなたを担当した先生について

- 4-1 担当の先生についてどのような印象を持っていますか
- 4-2 あなたに対する指導内容や方法について
- 4-3 保育歴\_\_\_\_\_年

### 5 あなた自身について

- 5-1 実習前には幼児教育に携わる職業につく気持ちはどの程度ありましたか
  - 1 保育者という仕事は嫌いで、適性もないと思っていた
  - 2 保育者という仕事は嫌いである
  - 3 嫌いではないが全くそのような気持ちはなかった
  - 4 嫌いではないが適性がないと思っていた
  - 5 嫌いではないが、どちらかというところ他の職業のほうに興味があった
  - 6 職業についてはどうして良いか自分でも判らなかつた
  - 7 適性がないのではないかと思っていたが、どちらかというところ保育者になりたい気持ちの方が強かつた
  - 8 一応なるつもりであつたが、しかしどうしてもなりたいたいという気持ちでもなかつた
  - 9 なりたいたいと思っていたが、適性があるかどうか不安であつた
  - 10 どうしてもなりたいたいと思っていた
- 5-2 実習が終わつて、今就職についてどのような気持ち、希望を持っていますか。自由に書いてください
- 5-3 実習で多少自信がついたことはありますか
- 5-4 実習で自信のなくなつたことがありますか
- 5-5 どうして良いか判らなかつたことがありますか。箇条書きにしてください
- 5-6 実習園での保育について疑問に思つたことがありますか
- 5-7 つらかつたことは何ですか



- 5-8 指導されたなかで、特に印象に残っていることは何ですか
- 5-9 自分でもうまく出来たと思えることがありましたか
- 5-10 園児との接触で、実習前には予想もしなかった出来事がありましたか
- 5-11 うれしかったことや感銘を受けたことがありましたか
- 5-12 実習について幼稚園に望むことがありますか

6 今回の実習について感想を自由に書いてください